

聖書：創世記 37：2～36

説教題：ヨセフをエジプトへ

日時：2024年4月28日（朝拝）

今日の箇所最初の 37 章 2 節に「これはヤコブの歴史である」とあります。これは創世記に繰り返し出て来る表現で、ここから新しい区分が始まることを示すしるしのようなものです。そしてこの後、この表現は創世記に出て来ませんので、ここから最後までが「ヤコブの歴史」であることとなります。しかしある人は思うかもしれませんが、この後に記されるのはヨセフを中心とした物語ではないか。だからここは「ヨセフの歴史である」とする方が適切なのではないかと。しかしこれ以後の部分はヨセフだけに興味があるわけではありません。たとえば次の 38 章ではユダのことが扱われます。むしろこの後、記されるのはヤコブすなわちイスラエルが神の摂理によってエジプトへ行くようになることです。神はすでに創世記 15 章 13～14 節でアブラハムに「あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。しかし、・・その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る」と語っておられました。そのご計画に従って事が導かれて行った様子がこの後、記されます。またヤコブから生まれた 12 人の子どもたちを頭とする 12 部族が誕生し、その彼らそれぞれへの祝福が特に創世記 49 章で語られます。ですからここはヨセフだけでなく、ヤコブの 12 人の息子たちを基礎とするイスラエルの確立と祝福のために働かれる神について記した部分です。そういう意味で「ヤコブの歴史」と最初に書かれることはふさわしいことですし、その視点で今日の箇所も、またこれ以後の箇所も、読んで行くことが大切であると思います。

まず登場するのはヨセフです。彼は愛する妻ラケルから生まれた最初の子であり、全体では 11 番目に当たります。その彼も 17 歳になっていました。彼は兄たちとともに羊の群れを飼っていましたが、まだ手伝いで、父の妻ビルハの子やジルパの子らとともにいました。このヨセフが父ヤコブに特別に愛されていたことがまず書かれています。彼は兄たちの悪いうわさを父に告げました。おそらく悪意はなかったと思われます。彼としてはただ兄さんたちの様子をそのまま告げたのでしょう。しかしそこには悪いことも沢山含まれていたため、兄たちにとってはたまったものではありません。ヨセフはいい子ぶって点数稼ぎをしていると見られたでしょう。そんなこともあってヨセフはよけいに父から可愛がられたようです。3 節に「イスラエルは、息子たちの

だれよりもヨセフを愛していた。ヨセフが年寄り子だったからである」とあります。ヨセフの下には 12 番目のベニヤミンがいましたが、彼の誕生と引き換えで愛する妻ラケルは死にました。このためベニヤミンには特別な思いを抱くことがなかったということなのでしょう。それよりも待ちに待ってついにラケルから生まれた最初の子ヨセフにヤコブは特別な思いがあったようです。そんなヨセフにヤコブはあや織りの長服を作ってやっていました。こんなことをヨセフにだけしたらどんなことになるか、想像がつきそうなものです。ここにヤコブに問題があったことを私たちは見ます。ヤコブの両親イサクとリベカも偏愛の人でした。父イサクは兄エサウを愛し、母リベカは弟ヤコブを愛しました。このことによる悲劇を経験して来たはずなのに、ヤコブはその悪い性質を受け継いでしまっています。そのため兄たちはヨセフを一層憎み、彼と穏やかに話すことができないほどでした。

さらに火に油を注ぐようなことが起こります。ヨセフは一つの夢を見ました。それは兄たちの束が自分の束の周りに来て伏し拝むというものです。もう一つの夢も見ました。今度は太陽と月と 11 の星が私を伏し拝んでいるというものです。後に 41 章 32 節でファラオの夢を説き明かす際、ヨセフは「夢が二度ファラオに繰り返されたのは、このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさるからです」と述べます。ここでも夢が 2 回繰り返されたのは、これが神からのものであり、確実に起こることを告げるものだったということになるのでしょうか。ヨセフはその夢を兄たちに話します。しかし普段から兄たちに憎まれている状況があるのに、こんな話をしたら益々問題になるということをヨセフは分からなかったのでしょうか。ここでも彼に悪意はなかったのではないかと思います。彼はある意味で無邪気です。しかし明らかに思慮が足りないと言わざるを得ません。父ヤコブもさすがにヨセフを叱りました。10 節で彼は「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか」とヨセフに言います。一方、ヤコブはこの夢のことを心にとどめていたとあります。彼自身も、あのベテルで夢を通して神の導きを受けました。もしかしてこの子にもそのような主の導きがあったのでは？という可能性を心に覚えていたということでしょう。重なる姿として新約聖書に出て来るイエス様の母マリアが思い起こされます。

さてこんな父の偏愛に基づく息子たちとの間の対立関係がついに爆発する時が訪れます。ヨセフの兄たちは羊の群れの世話をするためにシエケムに出かけました。その

様子を見て来て！と父に頼まれてヨセフは出かけます。しかしシェケムまで来たものの兄たちは見つかりません。そこで声をかけてくれた一人の人を通して、兄たちはドタンの方に行ったらしいという情報を得て、さらに北方の町へとヨセフはやって来ます。そこでついに兄たちを見つけました。その時、兄たちはヨセフを殺そうと企みました。彼らは互いに話し合いました。19～20 節：「見ろ。あの夢見る者がやって来た。さあ、今こそあいつを殺し、どこかの穴の一つにでも投げ込んでしまおう。そうして、狂暴な獣が食い殺したと言おう。あいつの夢がどうなるかを見ようではないか。」ここにまずヨセフを殺し、次に彼を穴に投げ込もうと彼らが考えたことが示されています。しかしこの計画はいくつか変更されることとなります。まず長男のルベンが「あの子を打ち殺すのはやめよう」と言います。殺さずに、この穴に投げ込もうと。ルベンがこう言ったのは、ヨセフを救い出し、父のもとに帰すためだったとあります。長男としての責任を感じてでしょうか。ルベンと言えば 35 章 22 節で父のそばめビルハと寝るという衝撃的なことをした人でした。彼はそれで失った自分の名誉をいくらかでも取り戻そうとしたということなのでしょう。この結果、兄たちはヨセフが来た時、彼を殺さずに穴に投げ込むこととなりました。その際、ヨセフが来ていたあや織りの長服は剥ぎ取り、彼を裸にしました。ヨセフにとっては突然、最悪の状況に投げ込まれることとなりました。

さらに当初予定していなかったことが続きます。そこにイシュマエル人の隊商が通りかかりました。彼らはエジプトへ下って行くところでした。それを見て四男ユダがヨセフを彼らに売ろうと言います。弟を殺し、その血を隠しても何の得にもならない。彼に手をかけてはならない。そう述べて銀 20 枚でヨセフをイシュマエル人に売りました。これは当時の奴隷の一般的な値段だったようです。その後で席を外していた長男ルベンが帰って来てヨセフがいないことを発見します。彼はヨセフを父に帰すことができなくなって嘆きます。

その後、彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎの血に浸して、父のところへ送り届けました。そして言います。「これを見つけました。あなたの子の長服かどうか、お調べください。」彼らは自分たちからは言わず、父に言わせます。父は調べて言います。「わが子の長服だ。悪い獣が食い殺したのだ。ヨセフは確かに、かみ裂かれたのだ。」「ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、何日も、その子のために嘆き悲しんだ」とあります。彼の息子、娘たちがみな来て慰めてもヤコブは拒みませんでした。兄

弟たちは益々虚しい思いになったことでしょう。ヤコブは「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい」と言うばかりです。こうしてヤコブの家にはこれまでなかったほど暗く重い雰囲気が漂うこととなりました。そんな中、最後の 36 節に、ヨセフはさらに売られてエジプトのファラオの廷臣、侍従長ポティファルの家にいたと記されます。死んだと思った彼はそこで生きていました。そしてここから信じられないような導きがこの後、展開することとなります。

以上の箇所から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。それは何と言っても神の導きの奇しさについてではないでしょうか。以下、三つのことを述べたいと思います。最初に思う一つ目のことは、神はよくもこんな家族をなおも用いてご自身の約束を果たして行こうとされたものだということです。果たしてこれが神の救いの契約を担うようにと選ばれた家族なののでしょうか。父ヤコブは一人だけを偏愛しています。そのように愛されたヨセフは無邪気でも結局は自慢しています。兄たちはそれを見て憎しみで心が一杯になっています。彼らは結果的にヨセフを殺しはしませんでした、遠くへ行く隊商に売り飛ばしました。そして父には死んだと思わせる工作をして、だましました。果たしてここから全世界に神が証しされて行くということなど起き得るのでしょうか。私たちがこのような家族を見たら、キリスト教とは全く関係ない家だと思うのではないのでしょうか。しかしそうでないのです。何とこのような家を通して神は全世界に対する救いの働きを進めて行かれるのです。これは信じられないようなことです！ここにキリスト教は一言で言って信じられないような恵みの宗教だということが分かります。ですからたとえ自分の家がどんなに壊れているように見えても、なおその者たちにも希望があるというメッセージがここにあります。

二つ目に見るのは神はご自身の計画実現のために主権的に細かな一つ一つの事柄をも支配し、導いておられるということです。先に見たように、神はイスラエルをエジプトへ導き、400 年の後、そこから導き出すというご計画を持っておられました。そのエジプト行きの導きを神はここでスタートし始めておられます。その際、今日の箇所で見た出来事の一つでもずれたならヨセフのエジプト行きは実現しませんでした。たとえばヨセフは兄たちを追ってシケムへ行きましたが、そこで一人の人に会わなければドタンで兄たちに会うことは起こりませんでした。また兄たちはヨセフを見つけて、まず殺そうと企みましたが、ルベンが殺さずに穴に入れようと言わなければヨセフの命はなかったかもしれません。またイシュマエルの隊商がちょうどそこを

通り、ユダが提案しなければ、ヨセフがエジプトへ売られて行くことはありませんでした。長男ルベンが一度、席を外したこともそうです。彼がこの場に居たら、父のもとに帰すため、ヨセフを売ることには全力で反対したでしょう。しかし彼が一時席を外していたため、ヨセフはエジプトへ売られることになりました。そしてそのヨセフがポティファルの家に売られなければ、この後のことも続きませんでした。今日の箇所「神」という言葉は実は一回も出て来ていません。つまり私たちの目にそうは見えない、偶然のように思われる一つ一つの出来事の上にも、神の隠れた奇しい摂理の御手があるということです。実にその小さい一つ一つのことも主が主権的な御手で導いておられるということを私たちは改めて知るのでした。

そしてさらに突き詰めれば、三つ目に、この主の主権的な御手は登場人物一人一人の罪の上にさえもあるということです。もちろん神が彼らに悪を行わせたわけではありません。ヤコブの手紙1章13～14節にこうあります。「だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。」これは聖書がはっきり述べている大原則です。ですから私たちはこの意味を弱めて考えてはなりません。登場人物たちはそれぞれ自分たちの思いで悪を行っています。彼らは神に強制されてはいません。自分の欲に従って行動しています。なのにその彼らの悪も神の摂理の御手の下にあり、神は彼らの悪さえも用いてご自身の御業を進められます。ここに聖書が語る驚くべき神の主権の御手についての教えがあります。それぞれの悪については、やがてそのことでそれぞれが神に取り扱われる時が来ます。

たとえばヨセフ。彼は無邪気とは言え、いい気になって兄たちの前で振る舞う点には明らかに不十分なところがあります。そんな彼は今後リーダーとして用いられるために訓練が必要です。そのためには見捨てられたり、苦しめられたり、忘れられたり、孤独にされるという経験が必要です。そういう中で主にこそ信頼して、真に人を導くことができる人へと聖められ、造り変えられて行かなければなりません。そのためにこの後見る様々なプロセスが必要になります。家の中でただ安住しているだけでは、それは決して得られないものです。

ヨセフの兄たちはどうでしょう。彼らはヨセフへの敵意をついに剥き出しにし、彼

を死に追いやったも同然のことをしました。しかしそのために彼らはこの後、その報いを受け、嫌というほど苦しめられ、思い知らされます。しかしその彼らは主の前から捨てられず、イスラエル 12 部族を形成する者たちとなります。このプロセスを経て彼らは救いはただ神の恵みによることを知り、共同体として神の恵みを心合わせて歌う者たちへと導かれて行きます。

ヤコブもそうです。すでに多くの訓練を受けて来た彼ですが、まだ必要のようです。彼はここでヨセフだけを偏愛していました。今日の章の悲惨の種は彼自身が蒔いたのです。彼はここでヨセフの長服という着物を使って子どもたちにだまされましたが、これは以前、彼が同じく着物を使って父イサクをだましたことを思い起こさせます。見事な平行関係があります。ですからここでもヤコブはかつての罪の報いを受けているわけです。彼はヨセフを失い、絶望します。しかし後に彼を取り戻して、救いはただ神の恵みによることをさらに深く学ぶようにと導かれます。

このようにして神は、やがて一人の救い主を遣わし、その方によって救うという約束をなおも彼らに担わせ、継続させ、発展させて行かれます。そしてついに約束の救い主イエス・キリストを遣わし、恵みによる救いを明らかにしてください。この祝福実現のために神はなおもヤコブの家族を導き、用いて行かれるのです。

今日の章で私たちが見たのは決して立派な家族ではありませんでした。むしろ偏愛があり、憎しみがあり、兄弟を売り飛ばし、最後は悲しみで一杯の家がそこにありました。それは何ら望みがないような家でした。ですからもしこれと似た状況に自分もあると思っても、なお希望を抱いて良いということになります。私たちも大変な苦しみや悲しみの中にあるかもしれません。それは自分の罪のせいかもしれません。あるいは他の人の罪のせいかもしれません。そうであれば、それは私たちそれぞれに責任のあることですが、しかし聖書が語る福音は、そんな私たちの苦しみや罪の上にさえも神の恵み深い御心とご計画があるということです。そのことを通して私たちを一層訓練し、聖め、真に大切なものに目を留めさせ、神に頼る祝福に生きるようにと招いている力強い御手があるのです。無駄なことは一つもこの方の前にはありません。すべてのことを、救い主を通して、益に変えて用いてくださる神がおられます。その神に望みを置き、その御言葉に聞き続けて、私たちの悪から信じられないような永遠に価値の残る善を取り出してくださる神の恵みに生かされ、この恵みの神を心を合わせ

てほめたたえる神の民の歩みへと導かれたく思います。